

近年の技術革新は、金融産業の構造を大きく変化させつつある。その方向性については、大きく分けると以下に分類することができよう。

(1) 範囲の経済性の変化

データ活用による他分野との連携が、今後一層可能になるだろう。その結果として、金融産業内での垣根、そして金融産業外との垣根は大きく崩れることになる。それによって、機能別に産業構造を考えることが一層重要になる。

(2) 規模の経済性の変化

ビッグデータ活用等、既存のサービス基盤の深堀りが、今までとは次元の異なるコスト削減やサービス高度化を実現させる。この規模の経済性をどう活かしていくかも、これからの金融産業にとっては重要な構造変化だ。

(3) 分散化の動き

新しい動きとしては、分散型金融 (DeFi) やエンベデッドファイナンスという言葉に代表されるように、既存組織と大きく異なる分散型の金融が今後発展してくる可能性がある。

それでは、これらの変化は金融理論をどこまで変化させるだろうか。抽象的に考えると、理論構造はあまり変わらない。どちらかといえば、金融理論の原則に現実が近づくと考えたほうが良い変化なのではないか。

それは一方では、現実の組織や規制上の課題が大きいことを意味する。組織面からすれば

- ・ どうアジャイルに変化できる組織を組み立てるか
- ・ その際、システムの健全性や利用者保護を回りつつ、組織や戦略をどう迅速に変えられるようにするか

が大きな課題だ。規制の面からも、このアジャイル性の確保が重要で

- ・ やはりシステムの健全性と利用者保護を確保しつつ、規制を迅速に変える仕組みづくりが求められる。

業界内外の垣根が崩れるということは、新しい市場競争が生じるということの意味しており、企業競争力という観点からは、その中で、どう差別化を図るが重要となる。

また、将来的な課題としては、他国のデジタル通貨や、通貨以外のデジタル資産等、自国マネー以外の資産が決済手段として使われるようになった場合の構造変化についても、注目しておく必要があるだろう。